

序論)先週の振り返りと本日の導入

先週の学び(教会分裂問題と一致への勧め)

- 分裂の原因:キリストではなく人に目を向けること。
- 伝道者の願い:人々がキリストに結びつくこと。
- 一致への道:
 - キリストの名によって歩むこと
 - 同じ信仰告白をすること
 - 仲間割れを避けること
 - キリストにあって心と理性を一つにすること

パウロの宣教姿勢(1:17)

- 福音を「ことばの知恵によらずに」宣べ伝える。
- 理由:キリストの十字架が空しくならないため。この世の知恵ではなく、シンプルな十字架のことばに神様の力が働く。

本論)

1)十字架のことばの真理(1:18)

二つの反応:

- 滅びる者たち:「愚か」
- 救われる私たち:「神様の力」

伝道時の葛藤:

- 「信じてもらえないのでは」という思い
- 救いの感動と、この世の感想との隔たり

結論:

この世の人々は、十字架を「愚か」と感じるか、「神様の力」と感じるかの二種類に分けられる。

2)十字架のことばに対する感じ方の違い(1:19-21)

神様の計画(イザヤ 29:14 引用):

- 「知恵ある者の知恵を滅ぼし、悟りある者の悟りを消し去る」(1:19)
- 神様はこの世の知恵や悟りを無力なものにされた。

この世の知恵の限界(1:20):

- 問い:「知恵ある者、学者、この世の論客はどこにいるのか?」
- 意味:十字架の贖いを解き明かせる知恵を持つ者はいない
- 科学、学問、弁論術では十字架の意味を説明できない

当時の嘲笑の例:

- アレクサメノスの搔き絵(ロバの神様を拝むような滑稽な信仰とされた)

現代にも通じる評価:

- 信仰が愚かだと見なされる

神様の知恵(1:21):

- この世は自分の知恵で神様を知ることができなかった
- 神様は「宣教のことばの愚かさを通して、信じる者を救う」ことを選ばれた

キルケゴールの言葉の紹介:

- 十字架と復活という「躓き」の前に人は碎かれ、信仰によりそれを乗り越える
- 理性的な理解ではなく、信仰による

神様の主権:

- 人の知恵や力ではなく、神様の一方的な主権によって人は救われる

3) 当時の人たちの反応とパウロたちの宣教(1:22-24)

人々の求め:

- ユダヤ人:「しるし(奇跡)」を求める
 - イエス様の回答:「ヨナのしるし(十字架と復活)」のみ
- ギリシア人:「知恵(理屈)」を追求する

パウロの宣教(1:23):

- 「私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えます。」
- 奇跡や理屈ではなく、十字架のキリストを語る

神様の召しとキリスト(1:24):

- 十字架のキリストは、ユダヤ人には躓き、異邦人には愚か
- しかし、「召された者たち」には、キリストは神様の力、神様の知恵

宣教の姿勢:

- 毎年、イースターやクリスマスで変わらずキリストを語る
- 愚かに見えても、主の召しがあれば十字架はその人に働く

4) 人の知恵より、神様の知恵に従う理由(1:25)

伝道時の悩み:

- 上手に、分かりやすく話さなければ…というプレッシャー
- どうせ伝わらないという諦め

神様の知恵の逆説:

- この世が「愚か」と思う十字架こそ、神様の知恵
- あえて人の知恵ではキリストを理解できないようにされた

神様の愚かさや弱さの力(1:25):

- 「神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからです。」
- 神様と人の中には圧倒的な差がある

神様の救いの確実性:

- 神様が人を召されたなら、私たちの語ることばが愚かに聞こえても、その人は必ず救われる

結論) 愚かに見える福音を語り続ける

心配は不要:

- 上手に語れなくても、無駄だと感じてても、キリストの十字架を語り続ける

神様の計画を信頼する:

- 十字架が理解されないのは当然。それが神様の知恵

神様の知恵と力を信じて:

- 単純にキリストを証しし続ける

主の働き:

- 主は必ず、救われるべき人を救い、キリストの十字架の力と知恵を理解させてくださる

私たちの姿勢:

- 自分の力に頼らず、主の力を信じ、パウロのように語り続ける